

みんなで人権^{じんけん}を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ—人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

かけがえのない出会い^{であ}

あつという間に、後期高齢者と言われる年齢になった。いくつになっても、私自身の最大の難問は、この日本社会で「女という人間」に生まれてきたということである。昨年のジェンダーギャップ指数が、日本は118位だった。この数字には毎年あ然としてしまう。

戦後、制定された日本国憲法では、すべての人は法の下で平等であり、性別や門地(家柄)などで差別されない(14条)と定められている。しかし、戦後の日本は、父権制社会の考え方が根深く残り、就職や結婚などで戸籍による差別なども行われてきた。就職の採用のときに、本人のこと以外は書かせないという「統一応募用紙」が国内で実現されたのは、1970年代の前半、部落解放運動によってである。

ちなみに、戦後、父権制の色濃く残る田舎の「むら」社会の中で、戸籍にも実体的にも父権・父親不在だった私は、18年間、母子ともに近隣からの視線のトゲにさらされる中で育った。思春期になる頃には、なぜか「言葉は敵だ」と思うようになり、言葉を駆使している大人たちを信じられなくなった。

「やられたら、やり返す」ことを心の中でくり返してきた思春期。その相手に届くことのないパンチの数だけ、自分の心にトゲが生えてしまったことだろう。気づくと、大学の門はそこから脱出するためだけにあった。アルバイト三昧の大学生活、夜は被差別部落の解放子ども会の講師を10年余り続け、部

落問題に初めて出会った。

アルバイトに通っていた頃、ある学習会のお誘いをうけて出かけた。そこにいたのは石牟礼道子さんや森崎和江さんなど、水俣病問題や女性問題などで、日本列島を「言葉」で揺さぶっていた40代の輝く女性たちだった。初対面だったが、その存在は、華やかで威厳があった。その学習会に参加するには、何か、自分の表現物を一度発表することがノルマだったが、私には卒業論文以外に表現した物は何もなかったの

と生きている。

書籍は、男女共同参画的なものやジェンダー論的なもの、性の売買に関わるものなどあふれているが、どれも事実・史実の記述がほとんどである。ベストセラーになった和江さんの『からゆきさん』の中の売られた女たちの記述には、彼女たちの悲しみによりそう作者の思いの深さを感じることができ。さらに、人間にとって、さまざまな性を含めて「性」とは何かということの掘り下げもあり、性差別の極まったところから、人間の性愛の豊かな回復を展望する言葉、論理が尽くされている。私は、命の時間があるかぎり、読み尽くしたいと思う。

問 教育政策課

ジェンダーギャップ

ジェンダーギャップ指数とは、各国の男女格差を「経済・教育・健康・政治」の4分野で数値化して表したものです。日本は昨年度118位で、他国と比べて大きな格差があることが分かっています。

本市の男女共同参画に関わる「市民意識調査報告書(令和4年)」によると、「政治の場」や「社会通念・慣習・しきたりなど」で「男性が優遇されている」と回答した人が、県や国の数値より高く、いずれも8割を超えています。

まずは、自分の身の周りの男女格差に気づき、見直すことが必要です。

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。